



みどりの風

平成28年7月1日発行
校報 第532号
〔みどりの風 第75号〕
練馬区立関町北小学校

皆で育てる温かい心

校長 大野 泰弘

6月はイチロー選手の輝かしい記録達成のニュースもありましたが、どちらかというと国内外でショッキングなニュースが多かったように思います。その中で、学校教育の立場では、やはり子どもの生命・安全に関わる報道には心が痛みました。例えば、両親が「我が子が言うことを聞かなかったから」ということで、我が子を車から降ろし、置き去りにしたという一件。6日ほど後に、無事に発見・保護され、両親の元に帰ることができましたが、暗い夜道で迷っていたら大変なことになっていたと思います。「どこまでが躰なのか」とついてはいろいろな見方や考え方があるでしょうが、この報道を見聞きしながら、ある方のお話を思い出しました。そのお話のテーマは「皆で育てる温かい心」というもので、副校長時代に、勤務校の保護者の方が、その要点をメモにして教えてくださいました。その主な内容は次の通りです。

〔命題〕 これからの変化が大きい時代に、よりよく社会参加できる子どもをどのように育てていけばよいか。
また、そういう子どもを育てるために親はどうあるべきか。

〔その先生のお考え〕

1 自己肯定感を育てる

小学校5年生から中学生で、自分のことを好きではないという子が増えている。自分が嫌いと答える子が多いのは、自分が大切にされているという実感が乏しいからである。例えば、いじめは子どもの心に大きなダメージを与えるが、見て見ぬ振りをしたり、自分は知らないと逃げたりする子ではなく、いじめられている子に対して家に帰ってから声をかけてあげられる子、自分だけよければいいと考えるのではなく、目の前に自分を必要としている人がいれば、手を貸してあげられる子に育てたい。家族の一員という思いをもち、かけがえのない一人として、「自分のことが好き」と答えられる子にしていきたいものである。家庭で我が子に「自分のことが好きかい？」と尋ねてみるとよい。

2 貢献の心を育てる

できる範囲でいい、何かを誰かのためにしてあげる。それには、家の手伝いが効果的である。お手伝いを通して「自分も役に立っている」と体で覚えさせる。現在は、1週間で30分も手伝いをしない子が多いという。昔は、薪で風呂を沸かしたり、弟妹の面倒をみたり、限りなく手伝うことがあった。親が子どもに手伝いをさせる。手伝いで失敗したら、怒るのではなく、どうすればよかったかを考えさせることが必要である。親がその余裕をいつも持っている、学校の教師も同じ。任せること、待つこと、考えさせることが大事である。そうすれば、親が世間体を気にすることは減り、子どもはよりよい行動ができるようになり、「人の役に立っている」という自己肯定感も育っていく。立派な子どもとは、成績云々よりも「もっている可能性を伸ばせる子」のことを言うのである。

3 地域全体で子どもを育てる

自分の子どもと同様に、地域の他の子どもも自分の子どもと思って接することが必要。子どもは本来地域の中で育てるもの。「私の子ども」という意識から「私たちの子ども」という意識に変えていこう。良いことは勿論褒めてあげる。その一方、地域の人が面倒を見てくれる、怒ってくれることに対して、親も「注意してくださって、ありがとうございます」と言えるようにならなければならない。大人が「地域の子ども、みんなの子ども」という思いになることで、「こんなぼくでもいい、こんなぼくでも何かの役に立つ」と思える子どもが地域の中で育っていく。いつも誰かがやってくれると思う甘える子ではなく、自分は「家庭や地域の中で喜んでもらえる人間なのである」と実感できるようにしていきたい。

お話はまだまだ続きますが、このお話をされた方は、「わいわいギルド代表 アドラー派心理療法士」で、「元 都立中部総合精神保健福祉センター課長補佐」でいらっしやった、星 一郎 先生です。この星先生が7月21日午後、学校保健委員会の場にお見えくださり、教職員と保護者・地域の皆様を対象に講演していただきます。

本校の子どもたちは、多くの保護者、地域の皆様に温かく見守られて育てておりますが、学校・家庭・地域の絆をより強く、そして、家庭内での親子の対話をより深めていくことができるように、星先生のお話を一人でも多くの皆様に聴いていただき、夏季休業中の子育てにご活用いただければ有難く存じます。詳細は後日お伝えいたしますが、子どもたちには、新たな3学期制になって初めての夏休みをぜひ有意義に過ごしてもらいたいと願っています。